

GB

ねるねるねるね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兄との再開といとこ達との再開を求めて海外から伊豆へ。これからの大学生活にほんの少しの希望と期待を持っていたはずなのに。

「俺の大学生活初っ端から狂いすぎじゃね?」

これはなんとも不憫なGB(good brother)のお話。

目次

再会	1
大人の部屋	7
パニツク	13

再会

電車から降りた俺の頬を潮風が撫でた。燦々と照りつける太陽が鬱陶しい。風に暴れる白い髪を掻き上げて、ずれたツーブリッジのサングラスを指で直した。俺は徐にスマートフォンを取り出して電話を掛ける。

「もしもし。ご無沙汰しています。北原です」

「しっかし武蔵もでかくなつたなあ！伊織は早速楽しんでるぞ！」

「兄貴と俺の迎え、連日申し訳ないす。兄貴迷惑かけてないすか？」

「いやいや！大丈夫だよ」

中学の卒業と同時に海外の高校に進学することを決めた俺は今まで四年間を海外で過ごしていたが費用的に日本に戻ることになり、日本の大学に進学することになった。日本の大学には特に興味も無く進路に迷っていた時一浪中の双子の兄の伊織と一緒に伊豆の大学に行くことを誘われて、二人で受かって進学することになった。そして今日から叔父さんの家で過ごすことになり、海外から直接向かった俺は兄の一日後に伊豆に着いた。

「武蔵は色男になつたな！」

「いやいやそんなことないっすよ」

「これからは家族みたいなもんだから敬語はよせ」

「Okay」

「がはは！敬語じゃなくて英語ってか！」

「ははは」

他愛もない話をしているうちに車は止まった。

「ここが家だ。どうだ？ダイビングショップをしているんだ。いいもんだろ」

「いいねー」

「荷物は入った所にでも適当に置いてけー。大学まで送つてくぞ」

ダイビングショップ「Grand Blue」。ここが新しい俺の家か。荷物を置くために扉を開けると美人の店員に挨拶をされた。

「いらつしやついませー、つて武蔵くん！」

「あつ！奈々華さんすか？ご無沙汰つす」

サンングラスをとつて挨拶した。彼女はいとこの奈々華さんだ。昔から可愛かったがここまで美人になるとは思わなかった。

「荷物置かしてもらつていいすか？」

「いいよー。そこら辺に置いてー」

「オーケー」

「これから大学？伊織くと千紗ちゃんはもう行つたよ」

「千紗つすか！懐かしいなあ」

「うんうん」

「じゃあ行つて来るつす」

奈々華に見送られて、叔父さんに送られて俺は大学へと行つた。そして兄がいるだろう機械工学科の教室へ行き、扉を開けた。まだガイダンスは始まっていないようで一安心しながら講堂の中を見回して兄の存在を探すが、見当たったのは兄によく似た露出狂の変態だけだ。

おかしい。もう一度見回すが変態しか見当たらない。そうこうしているうちに綺麗な女性が俺に手を振っていることに気がついた。

「武蔵ー久しぶり。千紗。覚えてない？」

「覚えてるよ。千紗。久しぶりだね。ねえ兄貴知らない？」

「伊織はあれ」

千紗がいかにも嫌そうな顔で指す先には露出狂がいた。流石にきつい冗談だ。

「いやいや冗談きついつて」

「冗談じゃないよ」

彼は俺と千紗が話す声が聞こえたのかこつちをみた。そして絶妙にキモい笑顔を浮かべたその顔は見慣れた兄の顔だった。

「Oh shit..」

ガイドランスが終わり、俺と千紗は兄貴より一足先に講堂を出た。

「あんなのほつといて行こ」

「そうだね」

苦笑いをしながら歩く。その時、兄貴の声が後ろから聞こえた。

「千紗ー！武蔵ー！お前らはサークル見学に行かないのかー？」

「兄貴。その格好どうしたよ？俺が日本出てる間に目覚めちゃったの？」

「とにかくその格好で話しかけないで！」

二人に言われて兄貴は自分の身体を一瞥した。

「確かにな。帰って服を着たいが帰り道が分からない。武蔵！服を貸してくれ！それか道を教えてくれ」

「悪いけど俺今日ワイシャツ一枚。これ脱いだら半袖の下着だけど日焼け止め塗ってないから無理だし道も知らないね」

「じゃあ千紗。服をくれ」

「半裸の男が服を脱げと迫っていて、」

通りかかった大学職員に千紗が助けを求めると兄貴は逃げ出した。

「何やってんだか」

「行こ」

外へ出るとサークルの勧誘の声で賑わっていた。

「武蔵はサークル決めた？」

「まだかなあ」

「向こうでは部活とかやってたの？」

「まあ色々やってたよ。バスケットかテニスとか。千紗は？サークル決めた？」

「私はダイビング」

「ダイビングサークルなんてあるんだあ」

「うん。ほら、あれ」

千紗が指差す方向を見るとそこには二人のムキムキの男と奈々華さんが立っていた。そして奈々華さんが俺達に気付いた。

「千紗ちゃん！武蔵くんと会えたみたいね！武蔵くんは伊織くんと会

えた?」

「最悪の再開でしたっすけどね」

「奈々華さんこれは?」

「ああ、伊織くんの双子の弟の武蔵くん。新入生よ」

「新入生、、」

何故だか彼等の目つきが変わった気がする。

「新入生ゲットオオ!!」

俺は茂みで息を殺して先輩が立ち去るのを待つ。すると兄貴の姿が見えた。兄貴は俺を見て手招きをしている。

「武蔵!?こんなところでどうした?」

「ダイビングサークルのマッチョに追われてる!」

「お前何やったんだ?」

「俺が聞きてえ!」

「取り敢えずそっちに行けば逃げれる!」

「サンキュー兄貴」

俺が茂みから出てこっそりと歩きだした時突然背後から何者かに掴まれた。

「みいつけたああ!!武蔵くん!!」

「かくれんぼはおしまいだあ!」

「ヴェルカアアム」

「Holy shit!!!」

筋肉と不快感が俺を締め上げ、悲鳴が響いた。

悲鳴を上げたあとのことは覚えていなかった。気づけば筋肉先輩達に囲まれていた。

「なあお前も被害者か?」

伊織への殺意を抱きながらなんとか抜け出して帰る方法を考えている時、金髪の美形の青年が声を掛けてきた。デカデカとアニメの

キャラクターがプリントされたTシャツが彼の美形をぶち壊している。俺は若干引きながら返事をした。

「俺は今村耕平だ。北原に騙されたやつが他にもいたとは」

「俺は北原武蔵、伊織の双子の弟だ。よろしくな、コーヘー。兄貴がごめんね」

耕平と仲良くなって俺はこの集団を抜け出た。すると少し離れた所にもう一つテーブルがあり、千紗が飲んでいた。

「千紗か。良かった」

「武蔵はダイビングサークル入るの？」

「ダイビング自体に興味はあるしすぐこーくやってみたいけど出来ねーよ」

「なんで？」

「だって、アルビノじゃん？」

「お前らは兄弟そろって似ているな」

千紗と話しているとどこからともなく筋肉先輩が出てきた。

「改めて、俺は機械工学科の三年の寿竜次郎だ。よろしくな」

「どこが似ているんすか？」

「出来る出来ないでやることを決めている所だぞ。大事なものは出来る出来ないじゃなくてやりたいかやりたくないかだ。お前がやりたいと思うならやればいい。問題点を考えるのは後でいいさ」

この人にこんなことを言われるなんておもってなかった。生まれつき出来ないことが多くて、やりたいことの大半が出来なかった俺は出来ることだけを選んで生きてきた。周りの大人もそれを望んだ。だから俺はこんなことを言われて戸惑っていた。

「武蔵って昔っからなんていうか、ずっと浮かない顔してるよね。でもさ私達が海で魚捕まえた話とか、遊んだ話するとほんつとに喜んで、羨ましがって、決まってるいいなー、俺にも出来たらなー。って言うってさ。今の武蔵も昔みたい嬉しそうに羨ましそうな顔してる。どう？ダイビング。ウェットスーツは全身覆うから肌出さないし、マスクは紫外線カット出来るのもあるし」

そうだ。何も出来ない俺は話を聞くのが好きで、自分に置き換えて

想像して楽しむのが好きだった。だけど今回は俺が体験出来る。置き換えるんじゃないやなくて俺自体が体験出来る。

「やりたいな。ダイビング」

「じゃあやろ」

こうして俺はダイビングサークルに入ることになったのだった。

「それはそうと武蔵くうーん」

「乾杯をしなきゃダメじゃあないかあー！」

冷や汗が流れる。再び筋肉が俺を締め上げる。

「こうなったら自棄だ。コーヘー！兄貴を酔いつぶすぞ！」

「ああ！」

騒ぐ俺達を千紗は極めて微かな笑みを浮かべて見つめる。

「バーカ」

そう呟いた。

大人の部屋

カモメの鳴き声が聞こえ、開けた窓からは涼しい風が入り込んで、なんとも気持ちのいい朝だ。扉を叩く音と叫び声さえしなければ。

「武蔵くん!?!」

「今月の支払いまだっすかー?」

何故に借金取り。この声は時田先輩に寿先輩。この二人に取り立てられるなんて地獄でしかない。淵の厚いポストンメガネをかけて直ぐに扉を開けた。

「なんなんすか!?!」

「お、出てきたか」

「逆にお前は今何時だと思ってるんだ」

俺は部屋の時計を見た。時刻は12:00直前。

「11:55分頃すかね」

「大学生は8:00には起きとくもんだ」

「きついつすね」

大きな欠伸をしてぐしゃぐしゃに乱れた髪をゴムで纏める。

軽くシャワーを浴びてリビングに出ると既にみんな昼食を食べていた。

「あ、武蔵。おはよう」

「おはよう千紗。みなさんもおはようっす」

「おはよう武蔵くん。それにしても武蔵くんはロングスリーパーね」

「休みの日は大体昼まで寝ちやうっすね」

「中学の時からそうだよな」

昨日、大学に置き去りにしてきた伊織だが戻ってきていたらしい。食卓の兄貴の隣の空いた席に座って朝食もとい昼食を食べ始める。

「それにしてもなあ飲み会まで空いちまったなあ」

何故か残念そうな顔をしている先輩達。予定でも潰れたのだろうか。

「そうだなあ」

そして二人の顔が俺と兄貴のいる方向へ向く。

「お前ら、夜までどうする?」

「何故そこで俺らに振るんですか」

「じゃあ別の用事があるのか?」

「今日は飲み会に参加しないって決めたんです」

確かに兄貴はこつちに来てからずっと外泊続きでそろそろ奈々華さんあたりに注意される頃だろう。先輩達も身を引くだろうと見ていると時田先輩が兄貴の首元を掴んだ。

「お前はなんのサークルに入ったつもりだ!」

ええー。ダイビングじゃないのかよ。

「ええー!?ダイビングじゃないの??」

その時、奈々華さんが口を挟んだ。

「伊織くん!もううちに来て三日目だけど知ってる?」

「えつと何をですか?」

「自分の部屋」

兄貴が白目を剥いている。

「兄貴、やっちゃまったな」

「大学生になって浮かれるのは分かるけど三日連続夜遊びなんてダメ」

「確かにそうですね。奈々華さんの言う通りです!と言うことで今晩は不参加です!」

明らかなドヤ顔で兄貴は先輩にそう言った。

「ま、仕方ない。武蔵は当然行くよな?」

「俺は予定もないしいつすよ」

「よし。しかし伊織は不参加か」

「いや〜ほんとすいませんね〜」

気持ちなんて微塵もこもっていない謝罪の言葉だ。

「ま、武蔵も行くんだし人数は足りるだろうさ。今日の飲み会は青海女子大との交流会だけだな」

兄貴の顔がまた白目を剥いている。

「兄貴。いや〜ほんとすいませんね〜」

「くそ!!弟にあおられる日が来るとは!」

俺は兄貴を煽った後、食卓を離れた。そして部屋着から着替えて、今日の夜の為に少しお洒落をして再びリビングに行くところには全裸になって奈々華さんに土下座をする兄貴がいた。

「ここまでしても許してもらえませんか!!」

「どうしたよ兄貴」

「おい伊織、何があった」

俺と先輩が訪ねると伊織は言った。

「俺思い出しました！自分がなんのサークルに入ったのかを！」

「いやダイビングじゃん」

「ダイビングだろ」

「いいえ！そんなものに入った覚えはありません！」

「素晴らしい掌返しだな」

「手首がねじ切れんばかりだ」

「もはや兄だと思いたくねえ」

「お願いします！奈々華さん」

「えっと、取り敢えず顔上げて服を着て」

カオスだ。裸の土下座と慌てる奈々華さんとそれを囲む俺達と冷やかな目で兄貴を見る千紗と。しかし何故に服を脱いだ。

「大体、どうして服脱ぐのよ」

千紗と疑問点が被った。

「表裏のない誠意を示す為です!!」

「遊びたいのはわかるけど、」

「ですが大将！」

「駄目です!!」

「そこをなんとか！」

「駄目なものは駄目！」

「どうしたら許可が下りるんだ」

場所を移して段ボールだらけの兄貴の部屋に俺達は集まっていた。

「あそこまで言われたら諦めな」

「いやだ！俺は諦めないぞ！」

「一体何がお前をそこまで突き動かしているんだ？」

「恥ずかしながら性欲です」

「本当に恥ずかしいな」

「そんなことよりどうやって奈々華さんを説得するかです！」

俺達は部屋を見回した。段ボールだらけでまだ荷ほどこきすらされていない。

「お、取り敢えず荷ほどこきをすませる」

「けどそれだけじゃ、」

「不足か？」

「ならお前が自立した一人の男であると示せる部屋を作れば良い」

「んなこと言われても、」

俺と先輩達は顔を見合わせて悪い笑みを浮かべた。

「仕方がない！」

「可愛い後輩の為に人肌脱ぐとするか！」

「兄貴が一人の男だと分かるような部屋作りをしてあげよう」

取り敢えず兄貴を外に出した俺らは部屋の中で話していた。

「武蔵、お前A V持っているか？」

「うす」

俺は自分の部屋の引き出しの一番下を抜いた。中にはびっしりと入ったA Vの数々。

「お前みたいな色男でも見るもんは見るんだな」

「逆に見てないほうがきもいっすよ。俺のは海外の友達に貰ってこっそり持って帰ってきたやつだから無修正っすよ」

「ほう。今度貸してくれないか？」

「あはは」

そんな会話をしながらA Vを並べていく。そして並べ終わり、兄貴を呼んだ。自信満々で部屋を開けた先に広がるA Vの数々。固まる兄貴と奈々華さん。俺は笑い声をなんとか堪えた。奈々華さんが早

足で立ち去った後、俺達は隠れていた所から出てきた。

「兄貴、いい部屋だろ?」

「どうだった?伊織?」

「バッチリだろ?」

「このド畜生共があ!!」

そして腹を抱えながら部屋を出て、隣にある自分の部屋に入った。そして数分後、俺の部屋の扉が勢いよく開いた。

「わあつて千紗じゃん。どしたよ?」

「伊織が、なんか、そういうビデオを見てた」

「ああー。まだ続いてたんだ」

顔を真っ赤にした千紗が椅子に座る。

「本当に伊織も武蔵も変わったね」

「それを言うなら千紗も奈々華さんもっしょ」

「なんか武蔵がお姉ちゃんにさん付けしてるの面白いね」

「確かにね」

10年ぶりなら嫌でも変わってる。性格も外見も。

「武蔵は昔はすごい大人しかったよね」

「そうだっけ」

「うん。そうそう。穏やかなのは今も変わっていないみたいだけど」

「千紗はもう少し賑やかだったな」

「そうかな?外見は伊織が男子っぽくなって武蔵が女子っぽくなった」

「ん?どう言うことさ?髪が長いから?」

「まあそれもありそう。伊織は男前って感じで武蔵は色男って感じ」

「違いが分からね、」

「どっちも良さがあるってこと」

「なら良いかな」

どうでもいいような話を繰り返していると隣から絶叫が聞こえた。

「またバカやってる」

「だな」

「まあ楽しそうな大学生活になりそうだな」

「そうなるといいね」

パニツク

浜辺に座る。俺は日焼け止めを塗っていなくてサングラスもしていない。暑苦しい長袖も着ないで肌を晒している。涼しい潮風に輝く太陽に、笑顔の俺。これは夢だ。何をしても叶うことのない夢だ。せめて夢ならもう少し見せてくれてもいいじゃないか。繰り返す鳴り響く電話の音が俺を現実に引き戻した。

「なんすか？」

「どうせ寝てると思うから起こしておこうと思ってな。今日はサークルでミーティングをするから10時に集合だ」

電話が一方的にかけられ、一方的に切られた。眠い目を擦って渋々立ち上がる。メガネを掛けて外に出ようとした時、扉が開いた。

「武蔵ー、朝だよーってもう起きてたんだ」

「先輩に起こされた」

「怖。まあ、朝ごはん出来てるよ」

「悪いね。ありがとう」

「そうだ」

朝食を食べに向かおうとすると千紗が何かを思い出したようであり返った。

「武蔵、お金貯めときな。あと眼科行って視力測つといて」

「えっと、なんで？」

「ダイビングって道具代がすごく掛かるから取り敢えずは伊織も武蔵もレンタルでやるんだけど、武蔵は紫外線を極力カット出来て視力を矯正できるマスクじゃないと駄目だろうから一足先に買いに行くよ。特注するなら多分届くまでに時間も掛かるだろうし。買いに行けるようになったら言つて」

「そう言えばそうだった。気づいてくれてありがとう」

千紗の頭を二回ほど軽く叩いて食卓へと向かった。

飯を食べ終わってシャワーを浴び終わると耕平も伊織も千紗も先輩も揃っていた。

「おー武蔵。おはよう」

「うつす兄貴」

「二度寝はしなかったみたいだな」

「お、サークル活動か」

食器を洗いながら叔父さんがこちらを楽しげに見ている。

「ええ、新入生と何かやろうと」

「新入生って何人入ったの？」

奈々華さんがそう言った。実は俺も聞きたかったところで耳を傾けた。

「今の所四人っす」

俺と伊織と千紗と耕平。確かに四人だ。

「新入生諸君！今日はよく集まってくれた！」

「新入生ってこの面子かよ。てかなんで耕平は真面目に参加しているんだ？」

双子だから思うことも似るらしい。

「先輩から緊急招集が届いたからな！」

ウキウキの顔の耕平が俺達に見せてきたのは先輩とのトーク履歴だった。

「今日はgrand blueに声優の水樹カヤさんが来るぞ！10時に集合」

と打たれたメッセージ。明らかに嘘である。

「んなもん嘘に決まってるだろ」

「リアリィ!？」

冷め切った伊織が言い、耕平は熱くなって時田先輩に聞く。

「うむ。嘘だ」

率直に嘘だと告げられ耕平は泣き出した。

「マジ泣きじやん」

「その歳で!？」

俺が耕平を慰めていると叔父さんが言った。

「カヤちゃん最近忙しいみたいだから当分来れないだろ」

その言い方だと前は来ていたようである。

「その言い分だと前は来ていたようですが」

またかぶった。

「ええ来てたわよ」

「リアリー!？」

耕平が再度熱を取り戻して奈々華さんに詰め寄った。

「うん！リアリー」

「俺、やる気が出てきました！ダイビングの事教えて下さい！」

耕平は軽い男だな。

「おお！任せとけ！」

盛り上がっていると千紗が口を開いた。

「私も参加しないといけませんか？」

確かに千紗は経験者だし必要ないイベントだ。

「経験者の千紗ちゃんは必要ないか」

「それなら私は不参加で」

そう言い立ち去ろうとする千紗を叔父さんが呼び止めた。

「千紗も参加しなさい。初心者 of 挙動を勉強するのも大事だぞ」

「ええ、」

あからさまに嫌な顔をする千紗。

「さーせん。俺、休んでいいですか？」

「どうした？武蔵？」

「実は日焼け止め切らしちゃってて日光に当たれないですよ」

「大丈夫だ。今日はプールでやる。海でやる時のために早いうち買つとけよ」

「まじすか!?!よっしゃ」

そう言っている兄貴も便乗して見学すると言い出した。兄貴の理由は予想がつく。

「俺、泳げないんですよ」

「大丈夫だ、そんなことは気にするな」

「泳げないダイバーだっているんだぞ」

「でも、」

「やってみる前からそこまで否定するな、もったいないぞ」

「そこまで言うなら」

千紗が心なしかほんのり微笑んでいるような気がする。

兄さんは泳げなくて俺は日光に対する嚴重な対策をしなければいけない。どちらも何かしらのハンデを負っている。でもそのハンデがなければ味わえない楽しさがあるように俺はワクワクする。いつかこの体質も愛せる時がくるのだろうか。

「と言うことで今日は水泳の練習をする！」

場所を変えて俺達はプールに来ていた。

「ダイビングで水に慣れておくということは重要なことなんだ」

「んじゃさっさと水着になんぞー！」

先輩に連れられて更衣室に入った。そして更衣室に入った瞬間に服が弾けとんだと錯覚してしまうほど音速で脱衣する先輩。

「兄貴？何が起こった？」

「ああ、武蔵は初めてか」

「あの方達は1日の半分以上を裸で過ごす裸族なんだ」

「まじかよ」

更衣室を出た俺達はプールに入る。冷たい水が心地いい。

「そう言えば武蔵は泳げるのか？」

「そんなに上手くないすけどね」

俺と耕平は時田先輩に、兄貴は寿先輩に教えてもらうことになり練習が始まった。

「取り敢えず潜って泳いでみるか」

そう指示が下され、俺は潜った。

コンタクトもメガネも水泳ゴーグルもなしでみる水中はただブヨとした青いものが広がっているようにしか見えなくて怖い。いといとこまで泳いで俺は顔を水から出した。

「怖え」

「そう言えばお前は視力も悪いんだもんな。無理しないでやってく

れ」

「うつす」

もう一度潜る。その時、目の前に何かが見えた。詳しくは見えないけど水じゃない。壁かと思ひ、手を前に出すとそれは大きく動いた。

「お前！何をする!?!」

手に残る柔らかい不快感とこの反応。あれは耕平の、。想像したくもない。

「すまん。こーへー」

俺は急いで引き返した。後ろから追いかけている気がする。

「おい！つたくお前らも元気だなあ！」

そしてヤバい顔した時田先輩も混じり、俺を追いかけて出した。

「まじいまじい!!」

必死の逃亡も虚しくパンツを引っ張られる感触を感じて、気づいた時には開放感に満ちていた。

「下の毛も真っ白なのか」

急いでパンツを回収して穿く。幸いにもまだ千紗は来ていない。

「先輩！やめてくださいいっすよ!!」

「水中で装備が取れた時の訓練だ！」

上手い理由でなんも言い返せない。

「ただ耕平と武蔵は問題無さそうだな。水に対する恐怖心があるわけでも無さそうだしパンツを取られてもそんなに危ない素振りをすることもなかったしな」

もう大丈夫そうだから俺は手探り状態でプールから上がった。そして手探りでサングラスを探していると誰かに手渡された。

「やっぱり早いうちにマスク買いに行った方が良さそうね」

「ああ。千紗、わり。そうだね。なんも見えないとなんも出来ないしね」

「ねえ、それサングラスないとどんだけ見えていないの？」

「千紗の顔もはつきり分からないくらい。今日は晴れてるしプールサイドのタイルも白だから眩しいね」

「ふーん」

「不便な身体だよなあ」

「でも私は良いと思う。髪、綺麗だし目も綺麗だし肌も綺麗だし」
「そう?」

すると千紗は何か言っではいけないことを言ってしまったかのよう
に口に手を当てた。

「気を悪くしたら、ごめん」

「いやいや。寧ろなんで気悪くするのさ。俺はその考え方好きだよ。
綺麗って言われるとそりゃ嬉しいし。金も手間も掛かる身体だけど
な」

俺は笑い飛ばして千紗の頭をぐしゃぐしゃ撫でた。

「なら良いけど」

いつも作り笑いを浮かべた武蔵の顔が一瞬だけ照れ臭そうに喜ん
だのを千紗は見逃さなかった。